

展観によせて(2)

釈迦の誕生 —延興2年銘・石造釈迦如来
坐像光背裏—

仏教には多くの仏が登場し、複雑な様相を展開いたしますが、その中で、お釈迦様とその十人の弟子は実在の人物です。即ち、釈迦が師なくして体得し、身を以て示した教えをその弟子たちが伝え、また拡大して広まったのが仏教です。従ってそれ以外の仏たちは仏教創始期あるいはその後における創造の仏であるとされています。

釈迦は紀元前565年、中インドの迦毘羅城主浄飯王の嫡子として生まれましたが、母摩耶夫人はその懐妊に際し、白象が室に入るのを夢に見ました。釈迦は母夫人が実家に帰る道すがらの藍毘尼園で無憂華の枝を折ろうとされた時、その腋下から生まれました。誕生した釈迦は即座に前に七歩、後に七歩、右に七歩、左に七歩あるき、一手は天を指し、一手は地をさして「天上天下唯我独尊」と唱え、これがいわゆる釈迦の降誕宣言と言われています。この時、天の竜王はいっせいに甘露の雨を降らし、灌浴し奉りました。

釈尊伝記中の各時期の釈迦を造像あるいは造画することはインド以来の伝統であり、礼拝の対象とされました。その中でこの誕生釈迦は、日本では一手は天を指し、一手は地を指す降誕宣言の姿勢で

小さな像に造られ、灌仏会（仏の灌水から由来して仏に甘茶をかける儀式。）の主役として古くから造像されてきました。しかし、インド、中国、朝鮮の三国には単独の誕生仏の遺例は少く、代りに石造の彫刻に誕生のシーンが表わされました。本館の中国北魏時代の延興二年（472）の銘を持つ砂岩製の如来像（写真左）も、その光背裏の中段に釈迦降誕のシーンを彫り出しています（写真右）。無憂華の枝を両腕でつかみ、石彫の画面の関係で倒れるように表わされているのが摩耶夫人です。右には妹のマハーブラジャーパティが夫人を支えています。夫人の右腋下から釈迦が生まれ出ており、それを受け止めようと一人の人物が帯のようなものを両手で広げて待っています。その左は釈迦の灌水のシーンです。降誕宣言のシーンは省略されています。光背を持った釈迦の両脇に六竜が描かれ、その下にそれぞれ人物が待っています。灌水とは実際には雨を降らして竜が釈迦誕生の喜びを表現するシーンですが、インド以来、このように釈迦の両脇に竜を配し、竜の灌水するシーンとしています。（村田靖子）



石造釈迦如来坐像・北魏時代



光背裏